

活動報告

佐久大学看護学部カリキュラム改正の プロセス

Revision of Undergraduate Nursing Curriculum in Saku University School of Nursing

水野 照美 鈴木 千衣 鶴岡 章子 佐藤 美由紀
安川 揚子 柿澤 美奈子 二神 真理子 宮原 香里

Terumi Mizuno, Chie Suzuki, Shoko Tsuruoka, Miyuki Sato,
Yoko Yasukawa, Minako Kakizawa, Mariko Futagami, Kaori Miyahara

キーワード：看護，カリキュラム，学部教育，カリキュラム評価

Key words : Nursing, Curriculum, Undergraduate, Curriculum evaluation

要旨

本稿は、佐久大学看護学部におけるカリキュラム改正の経過を記録し、今後のカリキュラム継続評価及び次回の改正につながる資料とすることを目的とする。

佐久大学看護学部は、2008年の開設時カリキュラムを2012年、2016年に一部変更して運用してきた。この経過を受けて2016年に設置されたカリキュラム検討推進小委員会によって、新カリキュラムが検討された。途中、指定規則の改正と新学部の認可待ちを経て、2021年4月から新カリキュラムの運用を開始できた。この経過について、1. めざすべき人材像の見直し、2. DPの見直し、3. APの見直し、4. CPの見直し、5. カリキュラム評価手法の策定、の5段階に整理した。加えて、6. 新規実習の立ち上げに伴う対応、7. 検討過程で確認したカリキュラム運用上の課題への対応についても報告する。

今後の課題として、組織的なカリキュラム評価の継続を図ることが残されている。

I. はじめに

佐久大学(以下、本学)は、2008年に看護学部の単科大学として開設された。教育理念「自律、創造、友愛」を掲げ、「社会に貢献し得る有為な人材を育成する」ことを目的とし

て、地域住民の健康を支援できる人材の育成を行ってきた。しかしその間、看護職への期待は、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けることへの支援、及び地域の多様な場で役割を遂行することへ変化している。この変化を受け、開設時のカリキュラムは、2012

受付日2021年9月30日 受理日2021年11月19日
佐久大学看護学部 Saku University Faculty of Nursing

年に保健師関係科目の一部、2016年に基礎看護学科目の一部について変更して運用されてきた。この部分的変更の経緯を受け、2016年にカリキュラム検討推進小委員会が設置され、カリキュラムの見直し及び改正に着手した。2018年に、厚生労働省「看護基礎教育検討会」が立ち上がり、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の改正案が2019年に出されるとの動きを受けて、変更内容を確認したのちに、カリキュラムの変更承認申請をすることとした。

同時期に、本学で福祉系の新学部設置の動きがあり、両学部学生が共通して学ぶ科目等の検討を加えた。共通科目確定の都合上、新学部の設置認可を待つ必要が生じたため、2020年10月に看護学部のカリキュラム変更承認申請を行った。文部科学省の承認を得て、2021年4月に看護学部新カリキュラム運用と、新設の人間福祉学部が同時にスタートした。本稿では、カリキュラム改正に取り組んだ経過を記録し、今後の継続的評価、及び次回の改正につなげる資料とする。

Ⅱ. カリキュラム改正のプロセス

カリキュラム検討推進小委員会(以下、本委員会)は、看護学部の教務委員会の下部組織として、多領域の教員で構成された。カリキュラム改正に取り組んだ経験のないメンバーがほとんどであったため、学士課程教育体系化のステップ(佐藤, 2010a)を参考に、1. めざすべき人材像の見直し、2. ディプロマ・ポリシー(Diploma Policy; 以下、DP)の見直し、3. アドミッション・ポリシー(Admission Policy; 以下、AP)の見直し、4. カリキュラム・ポリシー(Curriculum Policy; 以下、CP)の見直し、5. カリキュラム評価手法の策定、の5段階に整理した。

加えて、6. 新規実習の立ち上げに伴う対応、7. 検討過程で確認したカリキュラム運

用上の課題への対応も行った。カリキュラム改正の基本方針として、本委員会メンバーのみではなく、できるだけ学部の全教職員が検討のプロセスに参加する機会をもち、共通理解が進むよう努めた(表1)。上述の1~7の順に報告する。

1. めざすべき人材像の見直し

1) 新カリキュラム検討のための軸の確認

めざすべき人材像の見直しにあたり、開学後の現実を踏まえる必要があった。そこで、新カリキュラム検討の軸となるよう「佐久大学でどのような人に育ててほしいか」を、思いつく限り記述した文章を全教員から集めた(2016年6月)。次に、文章を類似のもので集めて本委員会で表題をつけ、おおまかな作業用資料を作成した。2016年8月の教員連絡会(看護学部全教員が参加)にて、この資料を題材に全員でグループワークを行い、卒業時の姿として欠かせないものを討議し、全体で共有した。グループワークの内容は、学内イントラネットに保存して、全教員が確認できるようにした。

グループワークで特に合意の得られた卒業時の姿としては、「人を理解し尊重できる」「基本となる知識・技術を踏まえた看護実践ができる」「自分の思いや考えを表現できる」「周囲の人と協調できる」「何が問題かを探して、改善・解決への努力を続けられる」「価値観・多様性・異文化の理解ができる」などがあった。グループワークの結果を受けて本委員会で、「人材像」「DP」「AP」のたたき台を作成し、同年12月の教員連絡会終了後にグループワークを行い、意見や修正コメントを得た。

また、本学が立地する長野県佐久地域は、従来「農村医学・地域医療の先進地域」として国内外に知られており、地域住民が自らの健康を保持しようとする力(自助・互助)を大切にしながら、地域医療が展開されてきた歴史

表1 佐久大学看護学部カリキュラム改正の経過

年月	看護系大学に関わる 社会の動き	カリキュラム検討推進小委員会の 主な検討事項	看護学部教員の参画
2016. 8		「どのような人に育ってほしいか」	教員連絡会グループワーク
12		「人材像」「DP」「AP」	教員連絡会グループワーク
2017. 3		授業科目の概要とDPの対応	教員全員で分担確認
4		2019年文部科学省申請を目指す	
8	モデル・コア・カリキュラム案	モデル・コア・カリキュラム案との対応	教員全員で分担確認
12	コア・コンピテンシー案	コア・コンピテンシー案との対応	
2018. 5	指定規則改正の動き	2020年文部科学省申請へと予定を修正	
8		「教育目標の実現につなげる私たちの関わり」	FSDS研修会グループワーク
12		新学部との共通科目、新規開講科目等	
2019. 6		進行状況、科目区分、カリキュラムツリー、 新実習	説明会開催、意見交換
8		本大学の強み、プロフェッショナリズム	教員連絡会グループワーク
10	厚生労働省「看護基礎教育検討会」報告書案	授業科目の概要の見直し	教員全員で分担確認
12		教育課程表、カリキュラムツリー	教員連絡会で説明
2020. 3		授業科目の概要と、DP・コアコンピテンシー との対応	教員全員で分担確認
6		DP達成の段階的目標、新規実習科目、配当 時期等	
10		文科省申請(新学部の認可後に申請)	
12		新規実習科目	FSDS研修会グループワーク
2021. 4		新カリキュラム運用開始	

がある。開学以来、地域の恩恵を受け、学生に学修の機会を提供してきた現状を確認した。

さらに検討を続け、2017年2月に、【佐久大学がめざすもの(案) 佐久大学は、地域とともに持続可能な健康社会を創造するために、人を理解し相互に尊重し合う豊かな人間性・社会性を備え、科学的な探求心や実行力をもった人材を育成していく】として、教務委員会及びグループウェアにて教員全体に伝えた。

2) めざすべき人材像につなげるための教職員のかわりの確認

本委員会での討議より、①主体的・自律的に学び続ける姿勢、②地域で暮らす方々への看護ができるようになる点、を現行カリキュラムよりも教職員がさらに意識することを明確にした。しかし、本学は附属病院を持たない地方の新設単科大学のため、実習場所の確保に苦労がある。このためカリキュラム改正

は現実的に、教員・時間数・実習先など限りある資源のなかでの工夫となることを確認した。また、新規科目を立てて終了ではなく、現行科目の内容と配置の工夫・科目間のつながりの可視化・正課外活動による補完等により、総合的に教育目標の達成を目指す必要があることも確認した。一方で、アンケート「学生が捉える佐久大学の魅力」にて明らかとなった「教員が優しく親しみやすい」「教職員の対応が丁寧」という特徴を生かせば、教職員一人ひとりの学生へのかかわり方がカリキュラムの成功につながると考えた。そこで、FD(Faculty Development)委員会の協力のもと、2018年8月FSDS(Staff Development)研修会「教育目標(及び3ポリシー)実現につなげる私たちの関わり」を実施した。

研修会では、①主体的・自律的に学び続ける姿勢をもつ学生を育てる、②地域で暮らす

方々への看護がよりできるようになる学生を育てる、③ケアの提供者として感性豊かな学生を育てるために、「私(教職員)は何をするか」についてグループワークをした。その結果、教職員が「地域の方と交流する活動に参加する」「実習を病院中心から地域へ」「大学を地域活動の拠点とする」「学生が思いや考えを表現できるようかわる」「成人学習者として学生を尊重する」「学生がミス・失敗・苦手を乗り越えられるようかわる」「教職員から学生を知る」等の意見が挙がり、カリキュラム改正への重要な考え方が得られた。グループワークの成果(付箋を模造紙に貼ったものの写真)と、全体発表の発言内容は、学内イントラネットに保存して、全教職員が確認できるようにした。

3) 「本学の特徴・強み」「本学におけるプロフェッショナリズム」の確認

教職員対象の途中経過報告会を2019年6月に2回開催し、質疑応答と、後にメールでの質問を受けた。質問を取りまとめて、8月の教員連絡会にて返答・説明をした。引き続き、看護学部教員全員でグループワーク「カリキュラム検討を通して改めて考える佐久大学の特徴とは」を実施し、「本学の強み・特徴」「本学におけるプロフェッショナリズムと教育理念『自律・創造・友愛』」の2点について検討した。

当時の課題として、「国際看護」を本学の特徴としたいとする願いが一部の教員から語られていたものの、授業(選択科目「国際看護論」)や課外活動(海外研修・国内交流)への学生参加は限られた人数に留っていた。グループワークの結果、「まずは現実的にこの地域に根差した学びが必要」「学生は『国際』を海外活動と受け止めがちであるため、国内外で可能な『異文化・多文化理解』と表現してはどうか」等の意見が得られた。改めて、本学のある長野県佐久地域で学ぶことの価値と、教育理念『自律・創造・友愛』の普遍性を再確認

した。

2. DPの見直し

1) DPの見直し

前述の2016年8月及び12月の教員全員参加のグループワークにおける意見を受け、本委員会で検討を続けた。当時のDP(表2)を検討の結果、一文に複数の行為動詞が含まれるため、評価に使いにくいという課題が確認された。

そこで、検討のポイントは、①「めざすべき人材像」から、現実的に達成可能な基準まで引き下げているか、卒業時到達目標として使えるか、②現実的で客観的評価が可能か、カリキュラム評価を行う際の質問項目としても機能するか、評価しやすいように一文の行為動詞は複数ではないか、③「知識・理解」「思考・判断」「関心・意欲」「態度」「技能・表現」の5領域(佐藤, 2010b)をカバーするか、④カリキュラムチェックリストや、カリキュラムマップの横軸として機能するか、の4点として検討を重ねた。加えて、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2011)を参照資料とした。また、DP検討にあたり、主要概念として「人間」「環境」「健康」「看護」の4つの用語を定義し、共通理解に努めた。その結果、新DP案(表2)を2017年2月に教務委員会・教授会に提出して承認を得た。

2) DP達成のための段階的目標の策定

次に、「DP達成のための段階的目標」の策定に着手し、2017年に現行科目の範囲で素案を作成した。その後、新学部構想委員会から、1・2年次共通科目検討の依頼を受け、新学部構想担当者を加えた会議において科目・科目名・内容・配置時期等を検討した。現行カリキュラムでは、単科大学ゆえに、いわゆる教養系科目数が限られたものであったが、新学部設置に伴い選択科目の増加が見込

表2 佐久大学看護学部 現行DPと新DP

【現行DP】	【新DP】
<ol style="list-style-type: none"> 1. 豊かな人間性と高い倫理観を養い、人々の生命を尊重し、尊厳と権利を擁護できる 2. 多様な価値観や生活背景をもつ人々を幅広く理解し、援助的対人関係を形成できる 3. さまざまな健康状態にある対象者の医療・看護における課題を発見し、解決に取り組むことができる 4. 国内外の地域特性と文化的多様性を理解し、健康課題を捉えることができる 5. 生涯を通して自己研鑽する自律的学修姿勢をもつことができる 6. 保健医療福祉チームの一員として、自己の役割を理解し、かかわる人々と協働できる 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 豊かな人間性と人間理解を支える幅広い教養を身につけている 2. 自律的に学修し続ける態度を身につけている 3. 生命を尊重し擁護する責任と役割を自覚することができる 4. 看護学の基本的知識と技術を活用し実践の力へと高める努力ができています 5. 地域特性と文化的多様性を理解し受け入れる態度を身につけている 6. 対人関係の基本として意見や考え・感情を受け取り伝え合うことができる 7. 多職種との協働において看護職者としての役割を自覚し行動ができています

表3 佐久大学看護学部 現行APと新AP

【現行AP】	【新AP】
<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護に関心をもち、自らすすんで課題に取り組む意欲と探究心がある人 2. 人との出会いをとおして学び合い、人への思いやりを深められる人 3. 社会の変化や科学の発展に広く関心を持ち、社会に貢献する意欲がある人 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校卒業程度の国語力(読解力・表現力)があり、高校で履修した科目について基本的な知識を有している人 2. 他の人々を支援することや社会貢献に関心をもてる人 3. 人間に関心があり、他の人々にかかわる努力が出来る人 4. 自らの関心に基づき、積極的に課題を見出し、課題を探究できる人

まれた。新学部構想に伴う1・2年次共通科目の増加を受けて、カリキュラムマップを用いて、科目の配当時期・履修方法及び卒業要件等の見直しをした。その経過を踏まえて、改めて看護学部の1・2年次科目の見直しを行った。

新学部で開講される科目の確定を受けて、新カリキュラム「DP達成のための段階的目標」を2020年に改めて確認・検証し、教務委員会・教授会に報告した。シラバスに掲載して、ガイダンスにおいて学生に説明をしている。また、段階的目標の意識化・振り返りのため、学年ごとの形成的評価と総括評価を予定している。

3. APの見直し

はじめに、現行APはどのような入試方法を用いて確認できているかを検証した。その結果、推薦入試(当時)及び一般入試で学力試験を課しているものの、学力にかかわるAPの記述がなく、入試制度との不一致に気づく

ことができたため、筆頭に加筆した(表3)。新APのたたき台を2016年12月の教員連絡会グループワークで示し、意見をj得て修正した。

4. CPの見直し

1) 新DP及び各種参照資料への対応について確認

本学看護学部の学生が新DPに到達するために必要な科目の過不足を検討するため、カリキュラムチェックリストを用いた。カリキュラムチェックリストは、新DP(案)を「列」に配置し、現行の授業科目の到達目標を「行」に配置し、両者がクロスするセルに、その関連性の度合いを表示した。各授業科目の到達目標が、DP達成のために特に重要な事項には◎、DP達成のために重要な事項には○、DP達成のために望ましい事項には△、関連しない場合は空欄とした。一科目について◎は3つまでに制限して、重みづけを確認した。チェック作業は、学部全教員が分担して

2017年3月に行った。

加えて、2017年8月に、「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2017)との対応を看護学部教員全員で分担して確認し、同12月には「看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標」(一般社団法人日本看護系大学協議会, 2018)との対応を確認(本委員会で開催)した。さらに、「大学における看護系人材養成の充実に向けた保健師助産師看護学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策」(大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会, 2019)との対応を確認した。その結果、重大な不足・重複科目は見当たらなかった。

2) 過去のカリキュラム評価に基づく科目検討

カリキュラムに関わる過去のデータとして、授業アンケート・卒業時アンケート・卒業生アンケート・就職先の管理者アンケートなど、学内に公表されたものを収集した。しかし、データを統合した、いわば総合的カリキュラム評価の記録は見つけられなかったため、集まった資料を基に、本委員会で見直しを行った。なお、カリキュラム評価は今後の課題として確認された。

本学は、長野県佐久地域に設置され、地域医療の先進地という環境を活かし、地域での暮らしを支えるケアを教授している。しかし、地域包括ケアシステムの考え方を基盤に「地域完結型」医療への移行が推進される現状において、本学看護学部の教育課程は従来の「病院看護」を中心とした枠組みを踏襲している部分もある。また、過去の卒業生アンケート及び卒業生就職先の看護管理者アンケートから、学生の特徴として「素直で協調性はある」ものの、本学の理念の「自律性・創造性」につながる「主体性・積極性」に関しては、課題が残ることが確認された。

地域包括ケアシステムの中で活躍する看護

職とは、多様な場で地域住民が自助・互助を展開できるよう支援する人材である。つまり、多職種と連携・協働する力が求められる。この力を育むには、ものごとの意味の多様性を知り、自己の考えの自覚のもとに他者と意見を交換できることが基本である。これは本学で掲げる自律性や創造性につながっていくものと考えている。

そこで、今回のカリキュラム改正では、人はそれぞれの文化をもつ生活者と捉え、多様性の理解を重視した科目、「地域生活者交流実習Ⅰ・Ⅱ」「多職種連携」「多文化看護論」を配置する。「地域での暮らし」を意識した科目として、「佐久の医療とケアの歴史」「地域支援と地域活動」「地域包括ケア論」等を配置する。また、新学部の開設により、福祉職を目指す学生とともに学ぶ機会となる共通科目も配置する。

これらの科目を1年次から配置することにより、人々を生活者と捉えることができ、住み慣れた地域での暮らしを視野に入れた看護が考えられるようになる。地域に関連する授業を各学年に配置することにより、地域支援を段階的に広くとらえられるようになり、社会ニーズを意識した看護職の役割に気づけるようになる。加えて、アクティブラーニングの手法を取り入れて授業を行い、自律性や創造性を発揮する姿勢の育成につなげていきたいと考えた。

3) DPと科目との関連、科目の順序性・関連性の検討

(1)カリキュラムマップの活用: 本学看護学部では、カリキュラムマップを科目の順序性を伝えるために用いた。表の一番上の「列」に新DPを配置し、「行」を学年で4つに分けて、1年次から4年次へ下から上へ科目が積みあがり、最終的にDPに到達するイメージを表している。カリキュラム全体のイメージを俯瞰して把握できるように、一科目一配置として、その科

目が最も寄与するDPの列に付置した。配置については、本委員会内で検討を重ねた。カリキュラムマップは、2016年にまず旧カリキュラム分で作成し、シラバスに掲載してガイダンス等で学生への説明に用いている。また、カリキュラム検討経過における全教員への説明にも用いた。

新DP2「自律的に学修し続ける態度を身につけている」と、新DP6「対人関係の基本として意見や考え・感情を受け取り伝えあうことができる」は、マップ上の科目配置が極端に少なかった。この2つの特徴として、基本的内容であることと同時に、他のDP達成を通してさらに充実させるものであるため、2つの列を合体させ、鉤型に表現して特徴を示した(図1)。

(2)カリキュラムツリーの活用:カリキュラムツリーは、科目間の内容の関連性を示めす概念図として用いた。図の一番上に新DPを配置し、図の最も下に基盤科目群、中央に専門基礎科目群、上に専門科目群を置き、かたまりとなる科目群を囲って、関連性を矢印で示した。

科目区分を超えた主要な柱として、看護専門職としての「プロフェッショナルリズムの育成」を中央に表現した。背景には木のイラストで根と幹と葉を表して、根本となる基盤科目群から始まり、学びを重

ねて関連づけることでDPに到達するイメージを示した(図2)。

カリキュラムツリーは本委員会でも検討を重ねて作成し、2019年6月の教員への説明会から用いた。新カリキュラムからシラバスに掲載し、ガイダンス等での説明に用いている。

(3)新CPの記述:新CPの記述にあたり、新カリキュラムにおける教育課程表を整理・確認した。まず、3つの大科目区分「基盤科目」「専門基礎科目」「専門科目」に分けた。「基盤科目」には、看護学の学びの土台となる人間・地域社会、生命及び健康、保健医療について学修し、リテラシーを高めるため、4つの中科目区分【人間の理解】【地域・社会の理解】【リテラシーの基礎】【プロフェッショナルリズムの育成I】を配置した。さらに、「専門基礎科目」は、3つの中科目区分、【身体のしくみと働き】【健康と予防】【保健と社会福祉】を置いた。「専門教育科目」は、看護専門職としての態度・姿勢、知識・考え、スキルを修得するため、5つの中科目区分【看護の基盤】【看護の展開】【プロフェッショナルリズムの育成II】【看護の探究】【看護の発展】とした。さらに、この度のカリキュラム改定でポイントとなる「地域社会に貢献できる人材を育む」「多様性の理解を育む」「自律性・主体性

【カリキュラムマップの使い方】

- ・佐久大学看護学部での4年間のカリキュラム(教育課程)について、全体イメージを把握しよう。
- ・現在の自分の位置(横軸)と、将来の姿(縦軸)を意識し、学びを積み重ねる姿勢を養おう。
- ・自主学習や課外活動などもマップに書き込み、在学中の学びを組み立ててみよう。

履修年次	ディプロマポリシー							単位数
	1 豊かな人間性と人間理解を支える幅広い教養を身につけている	3 生命を尊重し擁護する責任と役割を自覚することができる	4 看護学の基本的知識と技術を活用し実践の力へと高める努力ができている	5 国内外の地域特性と文化的多様性を理解し受け入れ貢献する態度を身につけている	7 多職種との協働において看護職者としての役割を自覚し行動できている	6 対人関係の基本として意見や考え・感情を受け取り伝えあうことができる		
4年次								
3年次								

図1 佐久大学看護学部 カリキュラムマップ(一部)

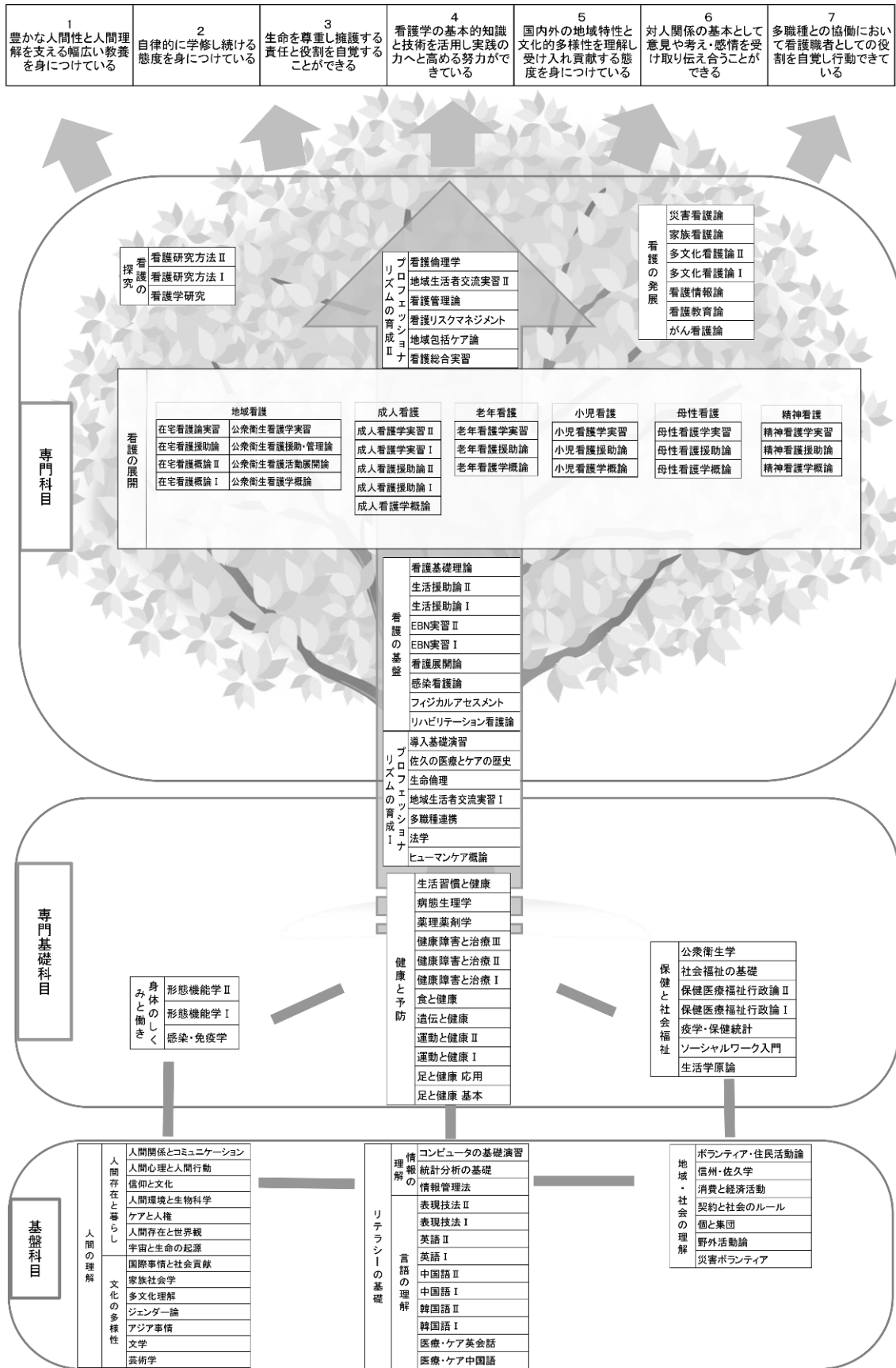


図2 佐久大学看護学部 カリキュラムツリー

やコミュニケーション力の養成」について取り上げた。

5. カリキュラム評価手法の策定

この度のカリキュラム改正プロセスにおいて、過去のカリキュラム評価の記録が見当たらないことが課題となっていた。つまり、継続的にPDCAサイクルを動かして、内部質保証の充実を図る仕組みづくりが必要であると確認できた。そこでまず、本委員会では、カリキュラム評価に活用しうるデータ、例えば卒業時アンケート、卒業生アンケート等について、確認時期・実施頻度・対象・評価項目等について一覧表を作成して確認した。その結果、実施責任者が明確ではなかったり、連続して実施していたものがいつのまにか途切れていたり、という課題が明確になった。この状況は自己点検・評価委員会に報告し、実施責任者を明確にして、必要なデータを収集する動きにつながられた。

次に、収集したデータのうち、どれをどのように用いて、いつカリキュラム評価を実施するかという企画が求められる。まずは、DP達成への段階的目標を用いて、形成的評価と総括的評価を実施し、カリキュラムの中間評価および年次評価として、課題の早期発見と対応につなげるよう取り組んでいる。

6. 新規実習の立ち上げに伴う対応

新規実習科目が「地域生活者交流実習Ⅰ(生活者交流)・Ⅱ(支援の実際)」である。この科目は、前述の「めざすべき人材像」「DPの見直し」「APの見直し」「CPの見直し」で整理したねらいの達成に寄与する科目として企画された。1年次と4年次に1単位ずつ配置し、地域医療の先進地とされる佐久市の大学として、この土地の方々から学び、看護職の役割について理解を深めることをねらいとしている。

新規科目の土台は、本委員会の実習担当メ

ンバーが立案した。実習先は、開学以来、地域貢献として主に課外活動・ボランティア活動として学生・教員が携わった事業を抽出して、実習先の候補とした。例えば、佐久市で実施する健康推進事業・国際交流事業・防災事業、これまでの実習病院の病院祭、地域の公民館活動等を検討した。地域の方の年代(子ども、成人、高齢者)や活動内容を広く検討して、実習目的を達成する可能性のある場所を検討対象とした。佐久市の事業に関しては、市役所企画課と連絡をとり、実習の許可を得た。同市以外の事業は、委員会メンバーが相手先と直接交渉をして、実習許可を得た。

学生が地域の方々から学ぶにあたり、教員も共に学ぶ必要があるため、看護学部専任教員全員で科目を担うこととした。本学にはチューター制度があり、学籍番号で学生を10グループ(9~10名/1学年)に分けて、1グループにつき担当教員を3~4名おいている。この制度を実習グループとして活用した。グループごとに実習先及び内容が多少異なるため、担当教員グループによる主体的な準備が必要となる。

このため、FD研修会(2020年12月)において、新カリキュラム及び「地域生活者交流実習」の説明を行い、チューター教員グループで意見交換をした。初の試みとなるため、教員側に不安や戸惑いが見られ、説明時期が遅いとの意見も受けた。本委員会で十分に意見を聞いて丁寧な対応をすることと、新しい取り組みへの動機づけに務めた。当日及び事後アンケートから得られた意見に対して、本委員会で返答を準備してグループウェアにて伝達した。さらに、地域生活者交流実習の情報交換会を立ち上げ、翌月から1回/月を目安に開催し、準備状況の情報交換・意見交換をして、教員同士の横のつながりづくりに務めた。さらに、本委員会実習担当メンバー(のちの科目責任者)を中心に、見出された課題への検討を重ねて実習準備を進めた。新型コ

コロナウイルス感染拡大に伴い、参加を予定していた地域の事業の中止が重なったため、感染防止対策と学びの達成が両立できるように、工夫し続けている。

7. 検討過程で確認したカリキュラム運用上の課題への対応

検討プロセスにおける課題への対応のため、カリキュラムに関する理解に努めた。例えば日本看護系大学協議会・日本私立看護系大学協議会のセミナーや、文部科学省の説明会等に本委員会から積極的に参加して、情報収集に努めた。得られた情報は、本委員会や学部教員への説明の機会を用いて伝達し、参考資料は学内イントラネット上のファイルに保存して、全教員が閲覧できるようにした。新型コロナウイルス流行後は、医学書院「カリキュラム編成準備セミナー」オンライン受講に申し込み、委員会メンバーだけでなく全教員に受講を勧めて、カリキュラムの理解及び担当科目の検討に活用した。

また、カリキュラム運用上、対応が必要な課題が確認された。新旧カリキュラムの読み替え科目対比表の作成、科目のナンバリング方法の検討、科目名の英語表記の検討に取り組んだ。さらに、カリキュラム評価のデータとなりうる4年次の総まとめ的な科目「看護総合実習」と「看護学研究」の評価方法の検討が必要となった。この件は、教務委員会を通して、「看護総合実習」は実習部会へ、「看護学研究」は同ワーキンググループに検討を依頼した。

本委員会以外での対応が必要な課題は、看護学部長や各種委員会の委員長等に相談・報告をして、対応や解決に努めた。本委員会の基本方針である、学部教員と共有して進める点については、教員連絡会(全員参加)を開催する学部長に相談し、教員への全体説明やグループワークの機会を得た。加えて、FD委員会と協働し、FD研修会・FDSD研修会の

テーマ案を提供して、教職員全体でカリキュラムを理解し討議する機会として活用した。また、APと入試方法のつながりを可視化する必要性については、入試委員会に伝えた。その結果、面接担当者がAPと面接内容とのつながりを評価票にて目視確認でき、APをより意識できる形式に改善された。カリキュラム評価に必要なデータ収集の不備については、自己点検・評価委員会に状況を報告して、カリキュラムアセスメントのためのデータ一覧表作成に貢献した。

Ⅲ. おわりに

この度のカリキュラム検討過程から、カリキュラム評価が課題として残されている。この対応を継続することが、新しいカリキュラムの評価につながり、PDCAサイクルを動かし、ひいては内部質保証につながると考える。

本活動報告に関して、開示すべき利益相反(COI)はない。

謝辞

カリキュラム改正に携わった本学教職員の皆様、とくに本委員会の委員及び前委員の皆様、オブザーバーの皆様、本学教務課及び事務局の皆様に感謝します。

文献

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 最終報告 平成23年3月11日, 2021/09/14, <https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vb6k2.pdf>

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 看護学教育モデル・コア・カリキュラム 平成29年10月, 2021/09/14,

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf

大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会. 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会 第一次報告 大学における看護系人材養成の充実に向けた 保健師助産師看護師学校養成所指定規則の適用に関する課題と対応策 令和元年(2019年)12月20日, 2021/09/14, https://www.mext.go.jp/content/20200616-mxt_igaku-000003663_1.pdf
一般社団法人日本看護系大学協議会. 看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業

時到達目標 平成30年6月, 2021/09/14.

<https://doi.org/10.32283/rep.5618b431>

佐藤浩章(2010a). 学士課程教育体系化のステップ—3つのポリシーの策定と一貫性構築 第1回組織体制づくりとめざすべき人材像の策定, 2021/09/14, https://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2010/04/06step_01.html

佐藤浩章(2010b). 学士課程教育体系化のステップ—3つのポリシーの策定と一貫性構築 第2回ディプロマ・ポリシーとアドミッション・ポリシーの策定, 2021/09/14, https://berd.benesse.jp/berd/center/open/dai/between/2010/07/06step_01.html